

今こそ遣り残した「日本再発見」

歴史の町並みを歩く

米山淳一

第1回 前田藩の商工業都市－高岡の町並み

夕陽に輝く土蔵造り

はじめに

「歴史鉄道をたどり歴史的町並みや集落を探索した後、地物を肴に一杯やる」なんてフーテン旅を続けてきた。鉄道も町もお酒も好きだから、僕にとっては自然体。風に吹かれて出会った生活文化にいつも敬意を表して止まない。

それを繋いでいるのが鉄道。車両ばかりか、駅舎、沿線風景等に風土が滲みでているから魅力的だ。

さて、まず何处へ？と考えあぐねていたら、編集長から「一推しの町を」とエールが飛んできた。おまけに「地域は北陸辺り」とのリクエストつきである。答えは迷わず「城端」とお返しした。城端は、城端線の終点で、急峻な山並みが迫る砺波平野の果てにある河岸段丘の町。前職時代に白川郷合掌造民家保存の仕事で、城端駅から白川村荻町行きの加越能バスに乗り換えていた。狭い町中をバスの車窓越しに眺めると格子の美しい伝統的町家がずらりと並び、町並みは見事。山を越えた五箇山との経済的な関係が深く、絹織物の町として発展してきた。しかも、城端線は、歴史鉄道。前身の中越鉄道は明治期に敷設されている。あこがれの地名「城端」にも惹かれた。

ところが友人と一杯やっていて、町中の道路が拡幅されてしまったことを思い出した。十数年前に城下町特有の入り組んだ町中をズド〜んと一直線に道路が貫通してしまっ

たのだ。歴史的景観に配慮した新たな町並みにも興味をそそられるが、急ブレーキである。そこで、次なる対象を前倒しにして「高岡」と決めた。重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建）が2地区あり、愛する町のひとつ。城端線の片側の終点駅にも納得して、いざ出発進行。

新高岡駅の賑わい

北陸新幹線が出来て以来、金沢へは何度も足を運んだが新高岡駅は初めて下車する。駅の正面は、南の砺波方面に向いている。シンプルでモダンなデザインの建築だ。駅前にはバスや自家用車と共存できる広いスペースが確保され伸びやかな空間がひろがっている。近くには大手スーパーの店舗が進出し、郊外駅の様相である。高岡駅を目指すには城端線に乗り換える。ちょうど新高岡駅と十文字にクロスする格好で、片側一面のホームが設けられている。乗り換えは簡単だ。列車を待つ間、駅前を眺めて思い出した。

茅葺き文化の保存を目指す「日本茅葺き文化協会」の理事を務める白川村(岐阜県)の担当者は、車で東海北陸道を走り新高岡駅前に駐車してから、東京での会議に出席している。以前は東海北陸道で郡上八幡を経由し南下、岐阜羽鳥駅から東海道新幹線を利用していた。これだって日帰りを自慢できる画期的なルートだったが、今や内陸部のみさんにとって東京行きは北陸新幹線経由が一般的になった。



大好きな車窓 棚田と散居村（黒部宇奈月温泉付近）



北陸新幹線一周年と新高岡駅舎



砺波駅に進入する 背後に残雪の山



戸出駅で 駅屋と跨線橋支柱は近代化遺産

町並み写真日和は晴天より曇天

改札口を左折しエスカレータで下りて、タクシー乗り場へ。ちらりと目に入ったのが万葉線。高岡駅前から駅中に停車場が移設され、乗り換えが便利になった。駅前に出ると日差しが眩いほどの晴天。

先にも触れたが高岡市内には、重伝建が2地区ある。金屋町と山町筋である。駅の北側に位置する二つの町並みは通りの両側にほぼ南北に長く伸びる形だ。タクシーに乗りして一刻も早く訪ねたい理由は二つある。余りにも天気が良いのと町並みが南北に延びている点である。伝統的な町家は軒が深いから晴れると軒下が陰になってしまう。しかも、この季節は午前と午後で片方の町並みのファサードにしか陽があたらない。片や順光、片や逆光になってしまう。銀塩フィルムカメラでは補正は出来てもデジカメはちょっと操作が面倒くさい。マニュアルカメラ漬けだった僕は、家電のようなデジカメは苦手なのだ。

朝寝坊で出遅れ、高岡駅前に降り立ったのは午後2時半過ぎ、だから一刻も早く町並みを訪ねたかったのである。町並みは山町筋が駅から徒歩10分、金屋町が徒歩20分程度だ。でもそんな余裕はない。タクシーでかつ飛び、まずは山町筋、金屋町の順で下見である。予想どおりお日様は高



砺波地方の散居村が車窓をよぎる 杉のかいよう（屋敷林）が健在



鳳鳴橋に羽ばたく金色の鳳凰 背後は千保川



金屋町の町並み 格子・袖壁を備えた木造の町家が連なり美しい



町家は奥が深い ガラス張りの建具で覆われた土蔵は雪国の証



鋳物師の店の間 作品を販売

い位置で輝いているから、両サイドの町並みの軒下は真っ黒。歴史的町並みの撮影日和は、光が柔らかな薄曇りや雨が最適。ディティールを旨く写し込めるからだ。

「ああ天気の良いのな」と嘆く。

「天気に文句を言うな」と祖母の声が聞こえてきそうなので、それ以上ばやくのは止めて、夕暮れ時に勝負することを決めた。さあ一つと様子を見てから、今度は金屋町へ急いだ。

金屋町は、山町筋よりも道幅が狭く、伝統的町家は木造だ。だからさらに条件は悪い。逆光の場合は、反対側の町家の軒下に入るなど工夫すればフードの役目をしてくれ、旨い具合に撮影は進んだ。

二つの町並み保存地区 まずは鋳物師の金屋町

様子見は、山町筋から金屋町と駒を進めたが、高岡の歴史を辿れば金屋町から山町筋の順で話をしたい。

高岡は今でこそ富山県であるが、江戸期は加賀百万石の前田藩領であった。前田利家の跡を継いだ二代目藩主である前田利長が約400年前に高岡城を築いたが、築城後わずか5年で他界。それに輪をかけたように幕府の一国一城令によって元和元年(1615)、高岡城は廃城となった。現在、城址は公園となって市民の憩いの場として息づいている。

その後、三代藩主前田利常の時代になって、高岡は城下町から商工業都市として発展することになる。城下町高岡は、台地上部に城、武家地を築き、中下段に町人地を定め、

さらに千保川西側の郊外地に金屋町を設けている。たぐみな都市計画がなされていたのは驚きだ。現在の高岡駅はこの高台に位置しており、中段の山町筋と郊外地の金屋町に出向く時にその高低差を実感できるから面白い。

金屋町は、前田利長が開城時に砺波郡金屋から鋳物師を招き、この地に住ませたことから金屋町と名乗った。当初は鉄鋳物の鋳造が盛んだったが、江戸中期以降は寺の梵鐘、火鉢、燈籠ほか、銅鋳物の生産が盛んになった。その後、高岡銅器の一大産地として知られ全国に販路を拡大。藩の財政を潤す結果となった。明治期には、万国博覧会にも出品され受賞の対象にもなっている。現在も高岡の地場産業として立派に受け継がれているのだ。

金屋町の入口は、千保川に架かる鳳鳴橋。中央に金屋町のシンボルとも言える、金色に輝く鳳凰が羽ばたく姿が目にと留まる。千保川は、城下町との結界でもあり、溶鉱炉の火から城下町を守る火除けの役割を果たしていた。鳳鳴橋を渡り、100mほど行くと、左右に金屋町の町並みが忽然と現れる。

それまでの風景とは確かに違う、威風堂々とした町家が幅約6m余りの石畳の道の両側にずらりと並んでいる。町家は、木造で真壁づくり、間口は3〜4間で一階の玄関にあたる部分に大戸を備え、店の間の表には地元でマサノコと呼ばれる千本格子が嵌め込まれている。深い軒庇や二階の両側に袖壁を設け、柱やヌキを見せる美しいプロポーションが印象的だ。ゆっくり歩くと両側から町家が覆いかぶさ



裏手のお庭はたいせつな空間



鋳物師町らしく舗装の石畳に青銅製のタイルが嵌め込まれている



六代目大寺さんとベテラン職人さんが語り合う



金屋町は細い路地が発達



住民がたいせつにしている地蔵 7町内ごとにある



屋根上に天窓がある町並み 大寺商店付近

◀河原本町の町並み

ってくるような錯覚を覚える。まさに歴史的空間の真つただ中を僕は歩いているのだ。

金屋町はもちろん、商家として今も鋳物の商いを行っている。茶の湯釜を並べた作家の店、さまざまな工芸品を扱う店。さらに資料館になっている町家もあり、伝統産業である鋳物を学べる点が嬉しい。町並みの中心地点に江戸期の町家が並び、町の端に行くにしたがって時代が下がり、立ちが高く間口の狭い町家が並んでいる。

以前にもうかがった町家を訪問した。町並みのなかほどの大寺幸八郎商店である。お庭が美しかった記憶をたどり再訪した。「どうぞ」と快く店の間から居間、お座敷へ。縁を介して、時代物の建具の向こうに茶庭的な清楚なお庭があった。今回は新緑の季節だったが、今回は春まだ浅い時期。同じお庭なのに随分と広く感じた。お庭の向こう側に土蔵があるのがよくわかった。お庭をじっと見入っていたらご主人が話しかけてきた。なんと六代目大寺康太さん。

すかさず、「町家は、表から店の間、居間と仏間、座敷、お庭、土蔵そして鋳物作業場と続いています」と話してくれた。さらに「町家は、間口が狭く奥が長い。だから採光

に苦労しています」と付け加えた。高岡では、お庭、白壁の土蔵、そして天窓が大切な明り取りになっていたのだ。まさに生活の知恵。天窓は飛騨高山や古川でも同じ構造だ。天井を貫いている四角い空洞の先に確かに窓があった。六代目に誘われ道に出ると、屋根からぴょこんと天窓が突きだしていた。実にユーモラスだ。

さらに町家の間に鎮座している地蔵の祠の前で足を止めた。すると、「仕事はどうだ」と通りすがりの年配の方が六代目に声をかけてきた。深々と頭をさげる六代目。なにやら鋳造の話が始まった。伝統的空間で伝統産業の話が聴けるなんてなんともラッキー。

「ロボットはだめ」

「治具が大事」

「金じゃない。面白くないとなぁ、仕事は」と、生の声が聞こえてきた。あとで知ったが、お相手は鋳造の治具を作る職人さんだった。職人さんの心意気を感じた瞬間だった。

日がだいぶ傾いてきた。そう、山町筋の町並みが夕日に輝く時間だ。六代目に再会を約束して山町筋に向かった。

山町筋は土蔵造りの商人町

予測どおり山町筋の町並みは斜光線があたり、存在感を増している。町家は土蔵造りで重厚そのもの。釉薬をかけた屋根瓦や箱棟、二階の扉が輝いている。何度来ても順光



では撮影できなかった赤レンガの富山銀行も初めてパッチリ。この赤レンガ建造物は、大正3年の建造だ。横浜にも負けない立派な銀行が鎮座している。まさに高岡の経済力の証にほかならないのだ。

その礎は、三代目藩主の前田利常が、高岡を城下町から商工業の中心地として奨励する施策に起因する。例えば、町人の他地区への転出を嫌い、町人の自治組織である「町年寄」を発足させて商業の発展の礎を築いたのである。高岡は、時を経るごとに商工業地としての性格を強めていった。藩内の米、塩、綿などの集散地としての、大いに繁栄を極めるのである。

山町筋も商業地として発展。町名の山町は、旧北陸道に面した十か町からなり、「高岡御車山」を所有し継承することによって由来している。同じように伝統的な祭礼が息づく町で、重伝建地区に選定されているのが飛騨高山である。町並みの保存組織が屋台組と連携している点も似ている。

では、なぜ山町筋の町家が土蔵造りなのか？

それは、明治33年(1900)の大火にある。繁栄の拠点だった木造の町家、大火で消滅してしまったのである。その後、町の復興を願って競って建築されたのが、土蔵造りの町家であった。防火を意識した建築は、建物全体を漆喰で塗り籠め、木部を露出させない仕上がりとなった。もちろん膨大な建築費がかかったと推測されるが、それは高岡商人の財力の底力だった。重厚な土蔵造りがずらりと並ぶ町並みは、迫力満点で、全国でも稀な歴史的景観を形成している。

中でも菅野家住宅(明治35年築、国重要文化財、公開中)は白眉。電力や紡績会社を設立し、後に政界にも進出している名家である。一階表は美しい格子、二階は黒漆喰で塗り籠めた扉が並ぶ。棟飾りの「シャチ」、雷紋の意匠を施した箱棟、その上に連続する「雪割」が実に凝っている。建物だけではなく防火壁ほかさまざまな仕掛けから、富の蓄積を読み取ることができる。さらに、鋳物町高岡ならではのハイカラな鋳鉄の支柱が下屋を支えているところが見どころだ。



袖壁をそなえた土蔵造りがずらりと並ぶ



立派な赤レンガの建物に重厚感が漂う富山銀行、まさにランドマークだ

▶高岡市民の誇り 豪華絢爛の山車

防災都市高岡の精神は現在でも引き継がれている。菅野家住宅の真向かいの土蔵造りをぜひ見てほしい。伝統的意匠を備えた建物だが、新築である。公衆トイレになっているが、実は防災施設なのである。この建物と背後の駐車場の地下は防火用水の貯水槽になっているからだ。いくら土蔵造りでも文化財に変わりない。焼失してしまわないために準備万端なのである。

旧知の友人と珠玉の一献

山町筋から駅に向かう通りを行く、万葉線の電車が見えた。新型の真っ赤な電車がかっこいい。一時は、車に押され「風前の灯」といった状態だったが、市民や企業の募金、市役所の努力で甦った。市内電車の走る町には不思議と歴史的町並みが息づいている。函館、長崎など然りである。元氣な姿を撮影ついでに片原町から高岡駅まで一駅乗車した。やけにアナウンスのテンポがよい。

「次はついに高岡駅、新湊生まれの志の輔でした」で、なるほど納得。みなさんの愛情に支えられている万葉線に拍手。

駅では、旧知の宮田確さんと待ち合わせ。白川郷合掌民家の保存でご指導いただいた設計士だ。酒と肴のいわば先生でもある。久々の再開である。「路地裏の店で一杯」と早くも以心伝心。電車通りをちょっと入れば飲み屋がひしめいている。引き戸を開けたらもう別世界。カウンター脇の卓に陣取った。

酒は高岡の地酒「勝駒」。少量生産の貴重品。冷蔵庫の奥から発掘できたから幸運。肴は白エビ刺しとホタルイカ。



◀菅野家住宅(国重要文化財) 明治35年の堂々とした土蔵造り町家



菅野家の屋根意匠 シャチ・雪割・箱棟が印象的



高低差が明解な商店街と電車



伝統産業看板 金屋町で



金屋町解説

山町筋解説 仏壇看板(河原本町で)



宮田先生一推しの陣容。「勝駒」はさりげなく旨い。とろりと甘い白エビと絶妙な組み合わせ。町並みや万葉線話に花が咲く。気が付けば列車の時間。城端取材の予定だったから宿は砺波駅前のままだ。キハ40に飛び乗った。「勝駒」の余韻がジョイント音とコラボして夢心地。

城端線にぞっこん

翌日も快晴。金屋町と山町筋の順光の町並み撮影に挑戦である。またまた朝寝坊。砺波駅10時16分発の普通列車でゴー。国鉄色キハ40系の3両編成だ。急いでいるのに戸出駅で7分停車。列車交換だ。順光の最後尾車両をばちり。

よく見ると、跨線橋の支柱が明治期の鋳鉄。瓦葺きの駅本屋もなんとなく古くさい。これで一気に目覚めた。戸出駅本屋は明治29年建造の歴史的駅舎。当然、跨線橋の柱も古い。寝坊したお蔭で戸出駅交換ダイヤに当たった。朝から縁起がよいのである。時は金なりとばかり、タクシー選択で金屋町へ。

帰りは、金屋町から山町筋まで、ゆっくり町歩きと決めた。千保川を渡り、曲がりくねった道に入った。幹線道路はほぼ真っ直ぐなのだが、脇道はくねっている。だから歩きたくなる。逆光で光る湾教した町並みが目に心地よい。



路地を入れば赤提灯が揺れている



◀少量生産「勝駒」 ▲白エビ刺しは手間のかけがえのないお酒 肴は白エビ刺しとホタルイカ

「ここはなんて町？」と、買い物帰りのご婦人に声をかけた。

「河原本町。でも本当は二番新町なの」と教えてくれた。河原本町は地名変更後の新しい呼び方だから馴染めないと言う。「地名は文化財である」と地名研究家谷川健一さんが主張されている。地名から土地の歴史、文化や風土、地形までも読み取ることができるからだ。二番新町ならぬ河原本町を進むと鋳物道具屋、タンス屋、高岡仏壇屋が並び、職人町らしさを実感した。

山町筋の撮影を終えて、土蔵造りの商家を改装した食堂「あんしんごはん」で昼食を摂った。食堂は総菜屋を兼ねており、「好きなものを選んで奥の座敷でどうぞ」と店員さん。客は、地元の主婦、年配者だ。伝統的建造物が生き返ったような賑わいだ。

さて、帰りがけに万葉線に乗って市の文化財担当者を訪ねた。二つの重伝建地区は素晴らしいと切り出すと「生活がにじみ出ている町並みが高岡の特徴かな？」と照れくさそうに笑った。伝統産業に裏打ちされた物語性が高岡の町を生き生きさせている。今年度、「日本遺産」に認定されたと言う。地道な「歴史を生かしたまちづくり」こそ地域活性化の要だと実感した。(地域遺産プロデューサー)